

## 社会的養護における天理教の社会福祉活動 (2)

天理大学人間学部准教授  
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

前回は、社会的養護における天理教の社会福祉活動について、施設養護と里親活動を整理した。今回は、天理教里親連盟(以下、里親連盟)が発刊している雑誌『さとおや』を元にして、天理教における里親活動の背景と、里親の信仰的な気づきについて整理する。

## 天理教における里親活動の背景

天理教の社会福祉活動として、里親活動が活発におこなわれている背景を整理する。

1点目は、里親同士のネットワークである。里親は、社会的養護を必要とする子どもを預かり、養育するという点から、周囲から特別な存在としてみられ、養育が困難なケースを養育している場合もあることから、地域で孤立することが課題になっている。特に、自らの意思によって里親登録をおこなった人にとっては、「手を挙げた以上は、頑張らなければならない」という思いを強め、相談することができないことも出てくる。そうした里親を支援するために、政策としては、里親支援専門機関が制度化され、相談員によるサポートやサロン活動がおこなわれている。天理養徳院も里親支援専門機関として奈良県内の里親のサポートをおこなっている。こうした支援に加えて、天理教の里親活動では、天理教里親連盟に加盟することで、天理教内の里親同士のつながりを得ることができる。天理教里親連盟には、450家庭が加盟しており、さらに「教区里親会」があり、現在29の教区里親会が発会している。そして全国の天理教の里親が交流できる「里親サロン」を開催するなど、里親同士の交流が盛んにおこなわれている。加えて、長年の里親経験を活かし、天理教の信仰を活かした養育法の開発として「天理教ファミリーコミュニケーションアプローチ(TFA)」が開発され、里親の技術向上や、里子との関係構築への独自のサポートがおこなわれている。

2点目は、教会で人を預かる経験が積み上げられていることである。これまで天理教の教会は、身寄りのない人や、何らかの理由で暮らす場を失った人を教会で受け入れる信仰実践が積み上げられてきた。教会で育った教会長夫妻は、そうした経験を有しており、住み込み人を抱えてきた経験が、里親活動をはじめきっかけにもなっている。また、すでに、住み込み人が暮らす教会では、里親登録をしている教会長夫妻に加えて、複数の大人で養育することが可能であり、また、生きづらさを抱えた住み込み人が里子との関係の中で変わっていく経験などが、手記には寄せられている。血縁の家族以外と一緒に暮らす苦労だけではなく、そのノウハウが、天理教内では積み上げられてきており、先述したネットワークを活かして、問題解決や精神的安定を図ることができることも里親活動の背景にはある。

3点目は、措置解除後の「実家」としての機能である。児童養護施設や里親家庭で育った社会的養護経験者は、近年、「ケアリーバー」として注目される。それは、原則として児童福祉法の対象である18歳で、社会的養護から措置解除となり、自立生活をはじめた後に、生活困難を経験するケースがみられるからである。そのため、アフターケアと呼ばれる措置解除後の

支援が重要となるが、天理教の教会では、里親活動をおこなっているかどうかに関わらず、生活に困難を感じている人を「おたすけ」として受け入れており、里子にとっては、措置解除後も「実家」として、教会を拠り所とすることができる。里子の中には、里親との生活経験を通して、入信する場合もあり、教会の信者同士のつながりや、天理教内で、同じ里子としての経験を持つ者同士のつながりを得る里子もいる。こうした背景によって、天理教の里親活動が広くおこなわれている。

## 里親自身の信仰的な気づき

では、里親活動をおこなう里親自身には、どのような信仰的な気づきがみられたのかを認確していく。

里親と里子のマッチングは、児童相談所からの依頼によっておこなわれるが、マッチングされた里子に対して「神様が縁をつないでくださった」と捉えている手記が多い。また、『さとおや』の表紙裏には、天理教里親信条と共に「子どもを育てあげるのではなく、子どもに成人させてもらうんだ。それが、お道の里親なんだよ。」という標語が掲載されているように、里子への養育を通じて、自らを省みることが大切にされている。こうした信仰的な土台は、里子の養育上で感じる困難に際して、大きな力を発揮している。里子の中には、不適切な養育環境や被虐待経験により、十分な愛着を形成することができず、暴言や暴力などの行動や、不登校や非行となった課題を抱える場合もある。これらの中には、里親との関係性を築こうとする子どもの「試し行動」も含まれるが、上記のような信仰的な土台は、「神様が里子を通して、自分を変えようとしてくれている」という気づきを生み、養育での困難と向き合うことにつながっている。特に、養育の難しさを抱えた際には、教祖伝逸話篇86「大きなたすけ」での「人の子を預かって育ててやる程の大きなたすけはない」「世話さしてもらおうという真実の心さえ持っていたら、与えは神の自由で、どんなにでも神が働く。案じることは要らんで」との教祖の言葉を支えにしていることが手記では寄せられている。「神様によって里子を引き寄せてもらった」「里子を世話することで、自らがたすかかっていく」という「いんねんの自覚」や、その上で、里親自身と里子に起こってくることを受け止め、「たんのう」するといった教義に基づく里親養育がおこなわれている。

こうした信仰的な気づきは、里親をする教会長夫妻だけではなく、その実子にもみられる。実際に、筆者が所属する天理大学の社会福祉専攻には、「両親が里親をしており、もっと社会的養護について学びたいと思った」という理由で入学する学生も多い。『さとおや』でも実子の手記がいくつか掲載されているが、里子の養育にかかりっきりになる親に対して不満を持つ時期もあるものの、親が懸命に取り組む姿勢や、実際に里子の壮絶な過去に出会うことで、「自分も里子に負けまいように一生懸命に生きなければ」という気づきを得ている手記もある。

児童相談所への相談件数が年々増加する中であって、天理教による里親活動は社会的にも大きな役割を果たしていると共に、またその信仰的な土台が天理教の里親活動を支えている。